

Title	外国にルーツをもつ人々との対話の試み
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 17 P.2
Issue Date	2011-10-15
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/7972
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

外国にルーツをもつ人々との対話の試み



対話コンポーネンツ（以下、対話コンボ）は、哲学的対話の手法を取り入れた複数の対話の場を設定し、まだ顕在化していない社会の諸問題について当事者・関係者を中心に考えるためのプログラムである。2002 - 2003 年度の科学技術政策提言「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」では「ネオソクラティックダイアログ」（NSD）を中核として3段階の対話が組み立てられ、実施された。

中岡成文さんと大学院生の高山佳子さんがGCOEプログラム「コンフリクトの人文学」のプロジェクト「移民問題についての哲学的研究」に参加していることをきっかけに、金曜6限の対話コンボ分科会は日本に住む外国にルーツをもつ人々との対話を目指して対話コン

ボの実施を検討し始めた。分科会で検討を重ねるにつれて、外国にルーツをもつ人々が対話に「参加」するためには、臨床哲学のメンバーが一方的に対話を計画するのではなく、対話の設計そのものを当事者や関係者とともに行う必要性が認識されてきた。それゆえ「対話コンボ」の構想そのものについてもこの課題に即して柔軟に変更し、当事者や関係者からのアイデアを積極的に取り入れて対話を漸次進めるかたちへとバージョンアップが図られている。

今回の特集では、まず対話コンボ分科会の活動を3つの場所に分けて整理し、2010年度から現在までの経緯を報告する。次に「さんかふえ」と「語り合いカフェ」という対話での経験を金と川崎がそれぞれ振り返る。